『千載佳句』・『和漢朗詠集』・『新撰朗詠集』所載の杜荀鶴詩校異

金澤　典子

要旨

晩唐の杜荀鶴（字は彦之、会昌六（846）～天祐四（907）年？）には、『唐風集』と題される詩文集がのこされている。現存する『唐風集』は、今體詩のみを収録する。宋蜀刻本が一本伝来するとともに、明刊本の汲古閣蔵本『唐風集』が伝えられていて、汲古閣蔵本は季振宜『全唐詩』の底本となり、『御定全唐詩』に本文が引き継がれている。

一方、杜荀鶴文集の唐鈔本および旧鈔本は知られていない。『千載佳句』には七言一九聯の詩句が収録されており、これは貴重な旧鈔本本文である。その中には、現存の杜荀鶴『唐風集』には含まれない二詩二聯を含む。『和漢朗詠集』には四聯、『新撰朗詠集』には二聯の杜荀鶴詩句が採られており、このうち『和漢朗詠集』の二聯は『千載佳句』には含まれておらず、日本独自の朗詠的な改変の可能性はあるものの、宋本とは異なる旧鈔本系本文の脈流をひく。

本稿では、『千載佳句』諸本および『和漢朗詠集』・『新撰朗詠集』の本文と、杜荀鶴文集別集（宋本・明本）、『文苑英華』（北宋成立）・『唐音統籤』（明末成立）・『御定全唐詩』（清初成立）等の総集との校異を示し、本文との比較を通じて、旧鈔本には避けられない誤写の可能性を排除し、唐代に流通したであろう原態の本文を見出すことを試みた。

キーワード：旧鈔本、『唐風集』、『全唐詩』

一、はじめに

晩唐の杜荀鶴（字は彦之、会昌六（846）～天祐四（907）年？）には、『唐風集』と題される詩文集がのこされている。巻数は二巻とも三巻とも十巻ともいうが（註1）、現存する『唐風集』は三巻であり、今體詩のみを含む。『日本国見在書目録』にはその書名はない。『唐風集』には顧雲（晩唐）の序があり、『詩経』の「国風」に対し、唐の新風という意で『唐風集』と名付けられたという。後世、杜荀鶴の詩体は「杜荀鶴体」（厳羽『滄浪詩話』）と呼ばれた（註2）。

杜荀鶴の詩集には、宋蜀刻本が一本のこされており、「杜荀鶴文集」という内題をもつ。

明刊本としては、汲古閣蔵本『唐風集』がのこされている。

現在ではよく知られていることであるが、中国の書物は、宋代の活発な印刷文化の中で、本文の改変を少なからず受けており、それに対して、唐鈔本や旧鈔本は、詩人の詠んだ原態に近い本文が保存されていると考えられる。杜荀鶴文集については、唐鈔本および旧鈔本は知られていない。しかし、平安時代中期に大江維時（仁和四（888）年～応和三（963）年）により撰録された『千載佳句』には、杜荀鶴詩句七言

一九聯の詩句が収録されており、これは貴重な旧鈔本本文である（註３）。その中には、現存の杜荀鶴『唐風集』には含まれない二詩二聯を含む（『全唐詩逸』には採られている）。平安後期成立の『新撰朗詠集』（藤原基俊（康平三（1060）年～永治二（1142）年）撰）の本文もまた旧鈔本系のそれであるが、二聯の杜荀鶴詩句が採られている。藤原公任（康保三（966）年～長久二（1041）年）による『和漢朗詠集』には杜荀鶴詩句四聯が採られており、その本文は朗詠に起因する改変を受けている可能性があるものの、そのうちの二聯は『千載佳句』には含まれておらず、旧鈔本系本文を考える上で貴重である。

本稿では、調査の対象とした杜荀鶴文集諸本について内容的な覚書を記し、『千載佳句』杜荀鶴詩句の、『千載佳句』諸本および杜荀鶴集別集・総集との校異を示す。また、唐代に流通した本文について考察する（註４）。

二、杜荀鶴詩の諸本について

杜荀鶴文集には宋蜀刻本が存し、その他の宋本は知られていない。上述したように、この宋蜀刻本は三巻本であり、序、目録を含み、各々の巻の第一紙第一行に「杜荀鶴文集序」、「杜荀鶴文集目録」、「杜荀鶴文集巻第一□□□唐風集」、「杜荀鶴文集巻第二□□□唐風集」、「杜荀鶴文集巻第三□□□唐風集」と記されている。律詩・絶句の分類はされずに、各巻とも「雑詩」と題して作品が配列されている。序には「太常博士修國史顧　雲撰」とある。顧雲は杜荀鶴の友人で、杜荀鶴には彼に贈った詩がある（「寄顧雲」）。

明刻本には汲古閣蔵本がある。汲古閣蔵本は「唐風集巻上」、「唐風集巻中」、「唐風集巻下」と題された三巻本であり、版心にもまたそれらが記されるが、「唐風集巻上」第一紙と「唐風集巻下」の最終詩紙には「汲古閣毛氏正本」（毛氏正本」は小字双行）と記されている。上巻は五言律詩、中巻は七言律詩、下巻は五言絶句と七言絶句を収録する。宋蜀刻本に含まれる顧雲の序文もまた採録している。宋蜀刻本に対して詩体での分類を施し、前から配列した場合と比較すると、配列が一致する場合が多いのではあるが、前後する場所もあり、宋蜀刻本とは異なる宋本を底本にして再配列をしたのだと思われる。各巻には、巻が収録する作品数も記されている。上巻には「今體五言凡一百二十六首」（実際には一百二十五首）、中巻には「今體七言凡一百四十首」、下巻には「今體五言七言凡五十二首」とあり、総数は三一八（実際には三一七）首で、古体詩はまったく含まれない。杜荀鶴「題仇處士郊居」には「笑我有詩三百首　馬蹄紅日急於名」とあって、汲古閣蔵本収録詩はおおよそ杜荀鶴詩の全てであると考えられる。

『唐音統籤』の杜荀鶴詩もまた詩の形態により分類されているが、詩の配置順序は汲古閣蔵本とは全く異なっている（『唐音統籤』では詩の内容も加味された配列となっている）。

清・席啓寓輯『唐詩百名家全集』は、杜荀鶴文集三巻を収録している。ここにもまた顧雲の序が採録されており、目録が付されている。巻第一は「杜荀鶴文集巻第一□□唐風集」として、宋蜀刻本と同様に作者名を記さず、二行目に「□雑詩」と分類名を記して、次の行から詩を書き始め、最初に七言律詩の「春宮怨」を置く等は宋蜀刻本に一致している。しかし、三首目の収録詩は異なっていて、全般に作品配列は一致しない。第二巻は「杜荀鶴文集巻中□□□唐風集」ではじまり「杜荀鶴文集巻第二」で終わり、第三巻は始まりが「杜荀鶴文集巻下□□□唐風集」、終わりが「杜荀鶴文集巻下」となって、宋蜀刻本と汲古閣蔵本を混在さ

せたような作りになっている。版心には「荀鶴集上」「荀鶴集中」「荀鶴集下」とある。本文は「閑」を用いて「閒」とはしないことから、宋本の形を留める（明刻本では一般に「閒」が用いられる）。また「果」と「菓」の異体字も、宋本と同じく、「菓」に作る。詩本文についても、一篇の詩の中にも、宋蜀刻本本文と汲古閣蔵本本文を混在させたような異同が見られる。たとえば、七言律詩「雪」（『千載佳句』に一聯を収録、金子番号301）では、席啓寓輯本と、宋蜀刻本・汲古閣蔵本の本文はそれぞれ以下のようであり、席啓寓輯本本文は、一箇所は宋蜀刻本と一致して汲古閣蔵本とは異なり、二箇所は汲古閣蔵本と一致して宋蜀刻本とは異同がある。

席啓寓輯本	宋蜀刻本	汲古閣蔵本
雪	雪	雪
風攪長空寒骨生	風攪長空寒骨生	風攪長空寒骨生
先於曉色報窗明	先於曉色報窗明	光於曉色報窗明
江湖不見飛禽影	江湖不見飛禽影	江湖不見飛禽影
巖谷惟聞折竹聲	巖谷唯聞折竹聲	巖谷惟聞折竹聲
巣穴幾多相似處	巣穴幾多相似處	巣穴幾多相似處
路岐兼得一般平	路岐兼得一般平	路岐兼得一般平
擁袍公子休言冷（一作莫）	擁袍公子莫言冷	擁袍公子休言冷（一作莫）
中有樵夫跣足行	中有樵夫跣足行	中有樵夫跣足行

詩題「雪」においては、席啓寓輯本は汲古閣蔵本と二句目に異同があるのみだが、「維揚春日再遇孫侍御」（金子番号105）などは宋蜀刻本と同じ本文に作り、多くは宋蜀刻本と同じ本文に作る。

季振宜『全唐詩』は、底本に汲古閣蔵本を用い、巻上最終紙（第十六紙）のオモテの後に四篇を挿入し（その後に、第十六紙ウラが続く）、また、巻下の最終紙のウラ（空白紙）に四首を書き加えている。季振宜『全唐詩』では、たとえば『文苑英華』明刊本や『萬首唐人絶句』のそれをそのまま切り貼りする場合が多くあり、その場合には詩の出自が明らかであるが、杜荀鶴詩のこの八首は書き写されたものであるため、出典は不明である。

季振宜『全唐詩』の特徴として、底本に直接総集類および別集との異同を書き込み、その片側が意味を成さないと判断された場合には削除し、両者ともに認められる場合には書き加えた字を「一作～」として取り込むことがある。季振宜『全唐詩』が用いた諸本としては、「宋本」『文苑英華』『楽府詩集』『唐詩紀事』が明記されている。出典が明示されないで字が添えられている箇所がごくわずかながらあり、おそらくそれは別の明刊本によるのだと思われる。

『御定全唐詩』は、この季振宜『全唐詩』を底本とする。そのため、汲古閣蔵本には撰録されていない八篇が季振宜『全唐詩』の挿入箇所のままに取り込まれている。『御定全唐詩』では、季振宜『全唐詩』に含まれない一篇（巻六九二「自江西歸九華」）がさらに追加されている。その一篇を除けば、両者の詩の配列順序も一致する。しかし、『御定全唐詩』の編集方針は、季振宜『全唐詩』のそれとは異なっていたらしい。季振宜『全唐詩』が諸本を比較した結果として（、「一作～」ではなく、）削除することに決定した本文が、『御定全唐詩』では「一作～」としてのこされている。たとえば、五言律詩「塞上」三句目「戍樓三號火（一作三急號）」（巻六九一）は、季振宜『全唐詩』では『楽府詩集』から「號火」を書き入れ、底本の「急號」を削除しているので、そのまま書き起こすと「戍樓三號火」に作ることになったはずである。このように諸本の多くの異文を取り込む『御定全唐詩』の校訂は、一篇の詩の拡がりを捉えることに重きをおいているようである（註5）。

杜荀鶴詩の唐鈔本・旧鈔本は現存しないが、『十抄詩』は

杜荀鶴詩を十首含んでいる。『十抄詩』の成立は不明なものの、推定では高麗前期と考えられていて、その刊本は韓国および北京大学にあり、また、一三〇〇年前後に子山が著したその注釈書『夾注名賢十抄詩』も現存する（註6）。芳村弘道氏は『十抄詩』および『夾注名賢十抄詩』には「宋代以降のテキストとは異なる古い系統の本から撰録されて」（註7）いるとする。

刊本であっても、総集類には旧い本文がのこっている場合があり、特に『文苑英華』には旧鈔本と同一に作る例が少なくない（註8）。『千載佳句』杜荀鶴詩句は、『文苑英華』に二篇、『才調集』と『萬首唐人絶句』にそれぞれ一篇採られており、『十抄詩』には二篇の採録がある。

本稿の校異では、『御定全唐詩』刊行までの諸本を取り上げて、その異同を示す。

三、杜荀鶴詩句校異

凡例

一．『千載佳句』の本文は、歴史民俗博物館蔵の影印（『貴重典籍叢書　国立歴史民俗博物館蔵　文学篇　第21巻　（漢詩文）』（臨川書店、二〇〇一年）収録）を底本とした。

一．以下の諸本を校異の対象とした。

『千載佳句』…歴博本（上述の底本）、九大本（『松平文庫影印叢書　第18巻（漢詩文集編）』（新典社、一九九七年）、甲本（国立公文書館蔵、和学講談所旧蔵）、乙本（国立公文書館蔵、林家旧蔵）、国図本（国会図書館蔵）。現在知られている『千載佳句』の諸本はこの五本のみであり、歴博本が鎌倉写本、九大本と甲本が江戸前期、乙本と国図本は江戸中期写本とされている（註9）。各々、「歴」「九」「甲」「乙」「国」と略記する。

『和漢朗詠集』…『粘葉本和漢朗詠集』（二玄社、一九九三年）と京都国立博物館蔵『芦手絵和漢朗詠抄』（e国宝（http://www.emuseum.jp/）にて画像公開）を用いる。芦手本は、雲紙本系列に分類されており、粘葉本との相違が指摘されている。山本まり子氏の一連の研究（註10）により、芦手本は、雲紙本系列に属するも粘葉本の影響が見られることが確認されている。両者に共通する異同は「和」で示し、差異が有る場合には、各々「和粘」「和芦」と記す。

『新撰朗詠集』…ハーバード大学フォッグ美術館蔵『新撰朗詠集』の影印である『鎌倉　新撰朗詠集』（二玄社、一九八四年）と、東京国立博物館蔵『新撰朗詠集』（松田武夫解説『新撰朗詠集：梅沢本複製』（古典文庫、一九六三年）を用いた。両者に共通する異同は「新」で示し、差異が有る場合には、それぞれ「新フォッグ」「新東博」と記す。

杜荀鶴文集…

中国国家図書館所蔵南宋刊本…宋蜀刻本唐人集叢刊『杜荀鶴文集』（上海古籍出版社、一九八〇年）。「蜀」と略す。

汲古閣蔵本…『唐四名家集』第３巻（商務印書館、一九二六年）。「汲」と略す。

席啓寓輯本…国会図書館蔵『唐詩百名家全集』（康熙四十一年東山席氏刊　光緒八年　七世孫席素威　補刊）。「席」と略す。

『文苑英華』…宋版（李宗焜整理『文苑英華』（中央研究院歴史語言研究所、二〇〇八年）、内閣文庫の明鈔本（国立公文書館蔵）、明刊本（『文苑英華』（中華書局、一九六六年））で異同を示した。明鈔本は「英明鈔」と略記し、明刊本は「英明刊」と記し、両者をさす場合は「英」と記す。第二七一～二八〇巻は宋本残巻が残る。傅増湘『文苑英華校記』（北京圖書館

出版社、二〇〇六年）で該当箇所を確認した。

『萬首唐人絶句』…『萬首唐人絶句』（文学古籍刊行社出版、一九五五年）を用いた。「萬」と略記する。

『楽府詩集』…中津濱渉『楽府詩集の研究』（汲古書院、一九七〇年）を用いた。「楽」と略記する。

『才調集』…『才調集』（台湾商務印書館四部叢刊、一九六五年）。「才」と略記する。

『唐音統籤』…故宮博物院編『故宮珍本叢刊　唐音統籤』（海南出版社、二〇〇〇年）を用いた。「唐」と略記する。

季振宜『全唐詩』…錢謙益、季振宜遞輯、屈萬里、劉兆祐主編『全唐詩稿本』（聯經出版事業公司、一九七九年）と季振宜輯、故宮博物院編『全唐詩季振宜寫本』（海南出版社、二〇〇〇年）を用いる。前者は初校版で、後者は『御定全唐詩』製作後新たに写した鈔本である。「季」と略記する。両者に異同がある場合、それぞれ季稿・季完と記す。

『御定全唐詩』…中華書局版『全唐詩』を用いる。「全」と略記する。

『十抄詩』…芳村弘道編『十抄詩・夾注名賢十抄詩』（汲古書院、二〇一一年）を用いる。「十」と略す。『夾注名賢十抄詩』はその注釈であり、『十抄詩』と異なる本文をもつ場合には『十抄詩』を「十北」、『夾注名賢十抄詩』を「十夾」と略記して異同のあることを示す。

一．本文は旧漢字通行字体を用い、異体字の区別は原則として行わない。但し、古字書等で二つ以上の漢字の別字とされている場合は、その例に従わない。踊り字はその前の漢字と同一として扱う。異体字の判定には、字様や金石文および『類聚名義抄』を用いた。なお、これまでの研究では、「万」と「萬」は時代性を表現するものと認識されているので、本稿においても両者を区別する。

一．本研究で主として扱う唐詩本文は、諸本において十四字が連続していることが多いが、七言詩であるので、それを記載する際には便宜的に空白で区切る。

一．本文中の割注に関して、「一作～」など本文にかかわる割注は小括弧でくくる。

一．音注は、『千載佳句』『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』本文に付されているものは明示し、校異に用いたその他諸本では原則として煩雑さを避けるために、原則として割愛した。その他、本文に関わらない割注も同様に扱う。

一．校異を示す場合は、まず底本本文を記し、その本文をもつ諸本を列挙し、諸本間の異同が有る場合にはその異同を、底本の該当箇所↓諸本の該当箇所〔諸本略記〕」の書式で記す。異同がない場合には無記とする。諸本の頭の一字を略記として用いる。本文の右に記された異本本文は、本文の下に右寄せの小文字で記し、本文の左に記された異本本文は、本文の下二左寄せの小文字で記す。作者名注と詩題注は、「／」で区切って示す。作者名が記されていない場合には、「／」を付けない。作者名と題の異同は、『千載佳句』五本のみの異同を記す。

一．本文の上の番号は、金子彦次郎『平安時代文学と白氏文集　第１巻（句題和歌、千載佳句研究篇）』（培風館、一九四三年）による千載佳句の作品番号（オリジナルは漢数字、金子番号と呼ぶ）である。

一．『千載佳句』のいずれに杜荀鶴詩が採られたかを示すために、以下では、杜荀鶴詩を含まない部立も小字であげる。但し、複数の部立が続く場合、紙面に限りがあるため行を改めない。

千載佳句上

四時部

（立春）

早春

24　千嶂雪消溪影緑　幾家梅綻酒波清　杜荀鶴／渕湖州杜員外春至日見憶

歴九甲乙国　※『全唐詩逸』有。

渕→酬〔九乙国〕

（春興　春曉　春夜）

暮春

105　夾岸柳絲懸細雨　繡田花朶弄殘春　杜荀鶴／淮揚春日

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全　「維揚春日再遇孫侍御」

夾→絶〔蜀席〕・絡〔汲・唐季全〕

（送春　首夏　夏興　夏夜　苦熱　避暑　納涼　晩夏　立秋　早秋）

秋興

175　四五朶山妝雨色　兩三行雁帖雲秋　杜荀鶴／淮陽南イ道中作

歴九甲乙国・和・蜀汲席・唐季全　「雋陽道中」

※和、秋・雁318。

※詩題、汲は「雋陽語道中」に作る。

陽南イ→南〔乙〕

176　雨籠蛩壁吟燈影　風觸蟬枝噪浪聲　杜荀鶴／投宣諭張侍郎

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全　「投宣諭張侍郎亂後遇毘陵」

※詩題、蜀席は「～毘陵遇」に作る。

蛩→苔〔蜀席〕・蛬〔汲・唐季全〕

（秋夜）

暮秋

211　雨匂紫菊叢々色　風弄紅蕉葉々聲　杜荀鶴／秋思

歴九甲乙国・汲席・萬唐季全　「閨中秋思」

匂→勻〔汲席・萬唐季全〕※「匂」は日本独自の異体字。

（初冬　冬興　冬至　冬夜　歳暮）

時節部

（元日　寒食　三月三日　七夕　八月十五夜　重陽）

天象部

（月）

風月

273　風射破窗燈易滅　月穿疏屋夢難成　杜荀鶴／旅舎

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全　「旅中臥病」

（感月　雨　風雨　暮雨　雨夜　晴霽）

301

雪

江湖不見飛禽影　巖谷時聞折竹聲　杜荀鶴／雪

歴九甲乙国・十・蜀汲席・英唐季全　「雪」

巖↓岩〔十北〕

時↓唯〔十・蜀・唐〕・惟〔汲席〕・時（集作唯）〔英〕

（雪夜　春雪イ无此題　晴雪　曉夜　閑夜）

地理部

（山水）

341

山中

月在釣潭秋睡盡　雲横樵徑野情深　杜荀鶴／山居自遣

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全　「山居自遣」

盡↓重〔蜀汲席・唐季全〕

徑↓逕〔蜀汲席・唐季全〕※ここは異体字。

（泉　瀑布泉　春水）

人事部

（丞相　將相　尚書　近臣　將軍　從軍　刺史　縣令　才士　幼智　才藝　文藻　褒美草書　圖畫　及第　慶賀　感恩　謝恩　兄弟　憶兄弟　外孫　朋友　文友　憶友　書信　遇友　不遇友　憶遇友　訪問　經過　招客　留客　留宿　美女　艶情　王昭君　閨怨　閑居　閑意　閑放　閑適　閑興　閑遊　閑官　閑散　自詠　詠興　寓興　感興）

※甲乙国、「圖畫」を「圖書」に作る。

525

感歎

百歳有涯頭上雪　萬般無染耳邊風　杜荀鶴／贈閑上人

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全　「贈題兜率寺閑上人院」

※詩題、季は「寺」を削除。

万↓萬〔国・蜀汲席・唐季全〕

（懐舊　老　老人　老病）

千載佳句下

官省部

（禁中　秘書省　集賢閣　古宮）

居處部

（居宅　隣家　舊宅　亭　林亭　水亭　亭樓　水樓　水閣　山館　池　秋池　泛舟　水石　渠　橋　勝地　隣境）※乙「隣境」↓「隣家」

草木部

（水草　水樹　梅　梅柳　柳　桃柳　櫻桃　山石榴　石楠　辛夷　木蓮　木芙蓉　檜　松　松柳）

628

松竹

澗底松搖千尺雨　庭前竹撼一窗秋　杜荀鶴／夏日遊張山人林亭

歴九甲乙国・新・蜀汲席・唐季全　「夏日留題張山人林亭」

※新、雑・山水502。
※詩題、蜀席は「夏日留題」。
前↓中〔蜀汲席・唐季全〕

（竹　竹柳　揚竹）

638

水竹

窗竹影搖書案上　野泉聲入硯池中　杜荀鶴／山中題弟

姪書院

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全

題弟姪書堂」

聲↓深〔唐〕、姪↓姓〔九乙〕・姪〔甲〕

（花竹イ本有此題　藤　薔薇　紫薇　牡丹　芍薬　蓮　露荷イ有此題　採蓮　菊　菊酒　蘭菊　雑花　花樹　花水　翫花　花宴　惜花）

禽獣部

（鶴　猿　鴈　鷹　馬　馬）

宴喜部

（公宴　宴會　春宴　夏宴　夜宴　逃夜宴　庚申　宴後　宴樂　妓樂　歌妓　蹈歌舞妓　歌　歌舞　琴）

763

琴酒

琴臨秋水彈明月　酒熟寒山酌白雲　杜荀鶴／山中寄諸

吟友

歴九甲乙国・蜀汲席・才唐季全

「山中寄詩友」

熟↓就〔蜀汲席・才唐全〕・在〔季〕

寒↓東〔汲席・才唐季全〕

（琴書　琴茶　箏　琵琶　笙　簫　笛　管絃　樂曲　酒）

812

詩酒

九轉靈丹那勝酒　五音清樂未過詩　杜荀鶴／白髪吟

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全

「白髪吟」

過↓如〔蜀汲席・唐季全〕

（飲宴　會飲　勸酒　醉　春醉　留醉　醉鄉或醉鄉　醉後　茶　茶酒　氷　厨膳）

遊放部

（遊覧　遊宴　春遊　夏遊　秋遊　冬遊　登山　遊山　眺望　夜歸　遊戯　圍碁　碁酒　漁　遊獵）

別離部

（別意　送別　別使君　餞別　宴別　春別　秋別　留別　別後）

955

行旅

漁舟火影寒燒浪，驛路鈴聲夜過山　杜荀鶴／宿臨江驛

歴九甲乙国・和・蜀汲席・唐季全

「秋宿臨江驛」

※和、雑・山水502。

寒燒浪↓歸寒浦〔蜀席〕・寒歸浦〔汲・唐季全〕

（水行　暁行　旅情）

隠逸部

（思隱　隱士　微隱士　思舊隱　卜山）

山居

1005

花亭野客眠雲醉　藥圃家童踏月鋤　杜荀鶴／題周繇先輩石門山庄

歴九甲乙国・十・蜀汲席・唐季全　「夏日登友人書齋林亭」

※詩題、十は「夏日登友人林亭」。

花亭→抛山〔十・蜀汲席・唐季全〕

眠雲→横琴〔十・蜀汲席・唐季全〕

藥圃→種藥〔十・蜀汲席・唐季全〕

童→僮〔十夾・蜀汲席・唐季全〕

月→雪〔蜀汲席・唐季全〕

鋤→鉏〔十〕

（別山居）

郊居

1010

洞裏客來無俗話　郭中人到有山情　杜荀鶴／題郊居

歴九甲乙国・蜀汲席・英唐季全　「題仇處士郊居」

話→話（一作語）〔英明抄〕

山→公〔汲席〕・公（一作山）〔季全〕

幽居

1023

緣溪摘菓霜晴後　出竹吟詩月上初　杜荀鶴／書齋言懷

歴九甲乙国・蜀汲席・唐季全　「書齋即事」

緣→沿〔蜀汲席・唐季全〕

菓→果〔汲・唐季全〕

釋氏部

（寺　禪居　僧坊　禪僧）

老僧

1050

禪衣衲厚雲藏線　壽臘高來雪尓眉　杜荀鶴／題老僧

歴九甲乙国・新・蜀汲席・唐季全　「題覺禪和」

※新、雑・僧564。

壽→夏〔蜀汲席・唐季全〕

尓→印〔九乙国・新・蜀汲席・唐季全〕

※歴甲は「市」を誤写して「尓」に作るか。

（贈僧　禪觀）

仙道部

（仙人　仙境　道士）

道觀

1082

風拂亂燈山磬曙　露霑仙杏石壇春　杜荀鶴／紫極宮上元有次呈諸道流

歴九甲乙国

（山人）

和漢朗詠集

※杜荀鶴詩句は四首。内、二首は『千載佳句』に採られる。

秋・雁　319　＝『千載佳句』　175　※同文に作る。

雑・山水　502　＝『千載佳句』　955　※同文に作る。

雑・水

514　葫蘆杓酌春濃酒　舴艋舟流夜漲灘　杜荀鶴

和・蜀汲席・唐季全　「戯贈漁家」

濃→醲〔唐〕

雑・山家

556　漁父晩船分浦釣　牧童寒笛倚牛吹　杜荀鶴

和・蜀汲席・唐季全　「登石壁禪師水閣有作」

新撰朗詠集

※杜荀鶴詩句は二首。内、二首は『千載佳句』に採られる。

雑・松　394　＝『千載佳句』　628　※同文に作る。

雑・僧　564　＝『千載佳句』　1050　※同文に作る。

四、杜荀鶴詩本文の問題点

以上の校異では、『千載佳句』と『新撰朗詠集』所載の二首、および、『千載佳句』と『和漢朗詠集』所載の二首はそれぞれ同文に作り、旧鈔本系本文であると結論できると思われる。

旧鈔本本文は、作者もしくはその時代の本文を留めているがゆえに、本文研究においては貴重であるが、鈔本ゆえの誤写を考慮に入れる必要がある。『千載佳句』と『和漢朗詠集』には杜荀鶴詩句が併せて二一聯収録されているが、そのうち、宋本・明本に存するのは一九聯で、二聯が散佚詩からの採録となっている。宋本・明本に収められた詩篇からの一九聯では、そのうちの一二聯が宋明本諸本とは明らかに異なる本文を作る（63パーセント。同音、すなわち、音通である場合を含む。『和漢朗詠集』所載のみの二首は宋本と同文に作る）。以下、異同箇所が誤字か否か、また、宋本による改変は考えられるかを検討する。

105　「夾岸」→「絶岸」〔宋席〕・「絡岸」〔汲・唐季全〕

「夾」と「絶」・「絡」は、音も意味も全く異なる。但し、いずれも入声である。『千載佳句』の「夾岸」は川の両岸もしくは対岸に柳、宋本等の「絶岸」は切り立った岸に柳、汲古閣蔵本以降の諸本が作る「絡岸」は柳が岸にからまるほどのイメージで、詩の中で不可という語は無いが、唐詩の用例では「夾岸」が多く、その岸に「花」「柳」「旗」の並ぶ様が描かれる。杜荀鶴詩にも「夾」の用例がある（「送蜀客遊維揚」）。一方、『御定全唐詩』で唐詩の用例を探ると、「絡岸」はここが孤例である。したがって「夾」が旧い本文である蓋然性は低くないと思われる。

汲古閣蔵本以降の「絡岸」は柳が岸にからまるという詩的イメージを創出し、対語「繡田」に対してより対比的となって、残春の狂おしい美しさを描き出して

176

いる。

「蛩壁」→「苔壁」〔蜀席〕・「蛩壁」〔汲・唐季全〕

「蛩」（蝗虫もしくは蟋蟀）と「蛬」（蟋蟀）の交替は、『千載佳句』146（白／題李十一東亭）・165（白／感秋詠思）にも見られる（「蛬」は古くは「蛩」）。宋本等の作る「苔」は、「蟬枝」の対語としては「蛩」「蛬」に劣るが、「蛩壁」「蛬壁」は馴染みのない詩語（後者は、尚顔「送獨孤處士」に一例がある）であるのに対して、「苔壁」は詩中でなくても、イメージが掴める。宋本での改変では、このように日常性のある詩語への改変が少なからず見られる。

301

「時聞」→「唯聞」〔十・蜀・唐〕・「惟聞」〔汲席〕

『文苑英華』は、南宋編纂時に北宋本では「時」、別集では「唯」に作る（「時（集作唯）」）とし、したがって、古くは『千載佳句』の作る「時」を本文としていた蓋然性が高い。

『十抄詩』は「唯」に作る。「時」と作る鈔本以外に、「唯」に作る鈔本が流通していたか、それとも『十抄詩』が参照したのが宋本であったかのいずれかであったと考えられる。

「唯」と同義の「惟」に作るのは、新しい本文であろう。

341

「秋睡盡」→「秋睡重」〔蜀汲席・唐季全〕

「盡」と「重」は、音も意味も全く異なる。宋本・明本の作る「睡重」は起きるのにけだるいようなかんじをいうが、『千載佳句』「睡盡」は、原義的には「眠盡」と同様に眠り続けることで、「眠盡」の用例はたとえば白居易「病中數會張道士見譏以此答之」（3567）にある。「山居自遣」詩の詩語として不適切さはなく、「盡」が旧い本文である蓋然性は低くないと思われる。

一方、「秋睡重」の「重」は、「盡」に比して、その対語である「野情深」の「深」と、より対比的である。白詩の宋本における改変でも、対句の対語がより対比的になる変更が行われており、ここもまた、原態が宋本により改められたと見るのがよいのではないか。

628

「庭前」→「庭中」〔蜀汲席・唐季全〕

旧鈔本と刊本の間で「前」から「中」への改訂は少なくないため（たとえば、680番首の劉禹錫「鶴」など）、この箇所も『千載佳句』の底本が「庭前」に作っていたと考えてよいと考えられる。『新撰朗詠集』においても、『千載佳句』と同文に作ることから、旧い本文は「庭前」であったとしてよいだろう。

763

「酒熟寒山」→「酒就東山」〔汲席・才唐季全〕

宋蜀刻本が『千載佳句』と同じく「寒」に作るため、「寒山」が旧い形であったのであろう。「寒山」と「秋水」を対語とする唐詩には、劉長卿「湘中紀行十首」の内の「斑竹巖」や、劉禹錫「罷和州遊建康」などがある。『才調集』は明本と同じに作り、『千載佳句』や宋本とは異文に作る点が問題点である。但し、『才調集』は後世の改訂がなされている場合もある。

「就」はここでは「成就」の義であろうから、「熟」とは同義である。『千載佳句』底本において「熟」であ

812

った可能性は排除できない。但し、「熟」は入声である。

「未過詩」→「未如詩」〔蜀汲席・唐季全〕

「過」と「如」の語義は異なるが、本詩の中では同意的である。『御定全唐詩』で用例を探れば、「未如」「未過」のいずれの用例も存する。したがって、『千載佳句』の底本において「過」であった可能性を排除することはできないと思われる。

955

「寒燒浪」→「歸寒浦」〔蜀席〕・「寒歸浦」〔汲・唐季全〕

対句の構造から、宋本等の作る「歸寒浦」は不可である。「寒燒浪」と「寒歸浦」は、平仄等にも問題がない。『和漢朗詠集』においても『千載佳句』と同文に作るため、『千載佳句』の底本において、「寒燒浪」であったと考えられる。

1005

「花亭野客眠雲醉　藥圃家童踏月鋤」と

「拋山野客横琴醉　種藥家僮踏雪鋤」〔蜀汲席・唐季全〕

「拋山野客横琴醉　種藥家僮踏月鉏」〔十〕

宋本以下の諸本と『千載佳句』では、大きく本文が異なる。『千載佳句』の本文では、野客（仕官しない人）はあずまやにいるというだけであるが、宋本以下の諸本の「拋山野客」（山を拋つ野客）では、旅人をイメージさせる。また「種藥家僮」（藥を種う家僮）も労働のイメージがより鮮明で具体的である。それに対して、『千載佳句』の「藥圃家童」は、夜も働くというイメージよりも、月影にいるという、やや幻想的な、もしくは、心華やぐ遊び的な要素が強調されている。このことは、対と成る句で、あずまやを「花亭」と表現することに通じているだろう。すなわち、この聯においては、宋本以降の実質性のある詩句に対して、『千載佳句』本文はその特徴に乏しい。しかし、『千載佳句』とは素性の異なる『十抄詩』（高麗成立）が「踏雪」ではなく「踏月」に作る本文をもつことからは、『千載佳句』の作る本文が存在したことが伺われる。宋代の詩の特徴として、唐代に比して実質性が重んじられていく傾向があり、宋刊本の本文改変もその潮流の中にあったと考えれば、『千載佳句』本文が唐代に流通した原態を留めている可能性は高いと考える。

1010

「有山情」→「有公情」〔汲席〕・

「有公（一作山）情」〔季全〕

宋蜀刻本が『千載佳句』と同じく「山」に作るため、「山情」が旧い形であったと考えられる。季振宜『全唐詩』と『御定全唐詩』は、「公情」に対して「山情」に作る諸本があったことを示す。

1023

「緣溪」→「沿溪」〔蜀汲席・唐季全〕

「緣溪」は平仄式に問題が生じ、不適切である。「緣」と「沿」は音が異なるが同義的であり、日本語で発音するといずれも（漢音・呉音ともに）「エン」であるため書き誤ったのではないかと推測される。「緣溪」の用例として、陶淵明『桃花源記』の「緣溪行　忘路之遠近」（溪に緣ひて行き　路の遠近を忘る）がある。

1050

「雪尓眉」→「雪印眉」〔九乙国・新・蜀汲席・唐季全〕

鎌倉写本と江戸初期写本甲本の「尓」では意味を成さず、不可である。書写が繰り返されたいずれかの時

点で、「印」の異体字「巿」を書き損ねたものであろう。他の諸本は「印」に作り、この箇所での誤写を含まない『千載佳句』伝本があったと考えられる。

『千載佳句』の筆写者が江戸通行の杜荀鶴文集を用いて、この箇所を改めた可能性は高くない。杜荀鶴文集の日本伝来本は知られておらず、中国でも珍本という扱いであることからは、書写者が杜荀鶴文集の刊本を見たとは考えにくい。

1050

「壽臘」→「夏臘」〔蜀汲席・唐季全〕

「臘」は僧の受戒後の年数で、夏安居で一歳と数えることから「夏臘」ともいう。しかし、意味としてはいずれも可で、平仄等にも問題がなく、『千載佳句』底本において「壽臘」であった可能性を排除できない。『新撰朗詠集』は、『千載佳句』と同じく、「壽」に作る。

以上から、『千載佳句』杜荀鶴詩句の誤写は、鎌倉写本の場合、1023・1050に各一箇所をみる。前者は音に基づき、後者は字形の極めて似ることによるものと考えられる。後者は、書写が続けられていくいくつかの段階で一人の書写者がその異体字を知らなかったために生じたものであるかもしれない。

音に基づく誤写の例としては、静嘉堂文庫蔵明鈔本『文苑英華』所載の白居易「新楽府」において、作者名を「白居易」とすべきところを「白駒易」と誤写したというものがある（註11）。詩人の名前は詩本文よりも書き誤りを犯しにくいようにも思えるが、書写という作業から誤写は排除できないことを示す例といってよいであろう（註12）。

全般的にいえば、『千載佳句』杜荀鶴詩句は丁寧かつ正確に書写されてきたといってよいのだろうと思う。

五、おわりに

以上、『千載佳句』撰録の晩唐詩人・杜荀鶴の詩句一九聯および『和漢朗詠集』撰録杜荀鶴詩句二聯を取りあげ、諸本との校異を示した（『和漢朗詠集』二聯には諸本との異同が見られなかった）。『千載佳句』の詩句本文は旧鈔本のそれであり、詩人もしくはその時代の本文を保存するという意味で貴重であるのだが、誤写を避けることができない。『千載佳句』鎌倉写本には二箇所の誤写があり、一箇所は字の類似性のため、別の一箇所は同音のために生じたものであると考えられる。

『千載佳句』の一九詩一九聯中には、佚詩からの二詩二聯があり、宋本・明本と異同のある聯は一一詩一一聯（誤写の疑われる1023番首を除く。1050番首は、鎌倉写本には誤写があるが、それ以外の本文にも異同がある）に及ぶ。本文に異同が高い割合で存在することは、『千載佳句』の、白居易を除く他の詩人の詩句の場合と同様である（唐鈔本・旧鈔本がのこり、文集全体が散佚することのなかった白詩は、異同の割合がこれほど高くはない）。『和漢朗詠集』には、『千載佳句』には撰録されない二詩二聯があり、宋本や明本との異同はない。旧鈔本本文として認定できる二一聯のうち、佚詩を除いた一九聯の半数以上が宋明本および現在の通行本とは（誤写ではない）異同のある本文に作ることは、唐詩を研究する上で留意すべき点であろう。

『千載佳句』所載の二聯は『十抄詩』にも含まれているが、本文を同一には作らない場合がある（金子番号1005）。日本の旧鈔本の性質については、『白氏文集』など多くの諸本の研究から明らかにされてきたものであり、『十抄詩』（およびその注釈書）のみではなく、朝鮮半島にのこる旧い漢籍等の本文のさらなら研究により、『十抄詩』（およびその注釈書）の本文の特質がより明確になるであろうし、朝鮮版本等の本文が明らかになればまた、旧鈔本の性質をより深く述べることができるだろうと考える。

註

（1）小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』（大修館書店、一九七五年）所収の中嶋みどり「杜荀鶴傳」の注二。中嶋みどり氏による「杜荀鶴傳」は、杜荀鶴詩研究の嚆矢である。

（2）松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）。

（3）『千載佳句』収録詩が旧鈔本本文であることは、拙稿「『千載佳句』許渾詩校異」（『文学研究論集』46（明治大学大学院、二〇一七年二月））および「『千載佳句』白詩本文について」（『日本古代学』9（二〇一七年三月））から明らかである。

（4）先行研究として、金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　第1巻（句題和歌、千載佳句研究篇）』（培風館、一九四三年）と宋紅校訂『千載佳句』（上海古籍出版社、二〇〇三年）がある。前者は国会図書館本と『御定全唐詩』との異同を示すが、『千載佳句』諸本間および劉禹錫文集別集との異同については調べられていない。後者は九州大学本を底本にし、『千載佳句』歴史民俗学博物館蔵本と金子氏翻刻、および、『御定全唐詩』との異同を示すが、公文書館蔵本。杜荀鶴文集別集との異同については触れられていない。

杜荀鶴詩校注には胡嗣坤・罗琴氏『杜荀鶴及其《唐风集》研究』（巴蜀書社、二〇〇五年）がある。この校注では、『御定全唐詩』を底本とし、宋蜀刻本、汲古閣蔵本、席啓寓輯の初刊本および光緒八年刊本、四庫全書珍本本、および、貴池先哲遺書（清劉世珩編）本と『御定全唐詩』との校勘を行っている。しかし、総集類との異同は示されていない。

（5）拙稿「『全唐詩』の校訂―白氏新楽府を中心に―」（『白居易研究年報』第15号（白居易研究会・勉誠出版、二〇一五年三月）では、『御定全唐詩』収録の白居易の新楽府において、このような校訂態度に基づくことを論じている。

（6）芳村弘道編『十抄詩・夾注名賢十抄詩』（汲古書院、二〇一一年）。この段落は芳村弘道氏の「解題」に基づく。

（7）（6）に同じ。

（8）太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』（勉誠社、一九九七年）など。

（9）この時代区分は、妹尾昌典「『千載佳句』の校勘」（『成城国文学』7（一九九一年三月））による。

（10）山本まり子「葦手本『和漢朗詠集』の位置」（『中古文学』61、一九九八年五月）、「十二世紀書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本について―葦手本を中心として―」（『書学書道史研究』16、二〇〇六年）など。

（11）神鷹徳治「静嘉堂文庫蔵明鈔本『文苑英華』所載「新楽府」（凡二十一首）影印」（実践女子大学『年報』21（二〇〇二年））。

（12）静永健「東京国立博物館蔵古筆切「白氏文集巻六十六」影印・翻字」（『白居易研究年報』4、二〇〇三年）において、静永健氏はその「白氏文集巻六十六」の誤りおよび欠字を指摘しており、八三首がのこるうちのおおよそ半数に誤りや欠字があると指摘されている。『十抄詩』に関しては、芳村弘道氏が（6）の著書等において収録詩のほぼ全篇に異同が見られると指摘している。